

鹿角地域における日本短角種子牛生産の実態

中 村 明 史

(秋田県鹿角畜産農業協同組合)

Present Situation of Calf Production of Japanese Shorthorn in Kazuno District

Akibumi NAKAMURA

(Kazuno Co-operation of Animal Husbandry, Akita Prefecture)

1 鹿角地域の概況

当組合は鹿角市・小坂町を区域とする秋田県の北東部に位置し、岩手県や青森県と隣接する盆地で、北に十和田湖、南に八幡平を控え、北から小坂川や大湯川、南から米代川が流れ、町のほぼ中心部で合流し日本海へと続いている。

この流域は農業生産の中心地で、地域の面積は885km²を有し、面積の約81%が山林・原野におおわれ、農用地面積の割合は19%である。

専業農家の割合は全農家の約7.4%で全国平均に比べて低い。また、農家1戸当たりの農用地面積は1.3haで、農用地の約66%が水田である。

農業部門の生産額では、米が46%次いで畜産の17%、その他果樹・野菜・葉タバコの順になっている。



図-1 鹿角市及び小坂町の配置図

2 鹿角地域における日本短角種の変遷と飼養の状況

当地域の短角牛は、古くから荷付牛として鉱山の鉱石資材の運搬等のために使役され、夏は周囲の山野を利用し、永くまき牛繁殖の飼養形態により地域に定着してきた品種である。

この間に幾多の変遷と先人の努力により鹿角地域の日本短角種の改良と増殖が推進され、逐次増頭を続けてきたが、昭和55年以降の飼養頭数は横ばいとなり、飼養農家戸数では減少している。現在の管内における飼養農家戸数は660戸、飼育頭数は1,540頭で、1戸当たり飼養頭数が2.3頭と零細である。

また、当地域における日本短角種の子牛生産は、例年5月中旬に山上げし10月下旬の山下げまで放牧し、秋の子牛市場で販売しているのが実態である。

表-1に管内の放牧飼養状況を示した。管内には熊取平地区共同利用模範牧場を含め21の放牧組合があり、利用組合員数は全体で790名である。1組合当たりでは少ないところで十数人、多いところで150人、平均が約40人となっている。

放牧地の大半は国有地で改良草地在730ha、自然草地在2,800haで繁殖雌牛1,480頭に37頭の種雄牛を

表－1 昭和58年度 管内放牧飼養状況

項 地域	放 牧 組合数	種雄牛 頭 数	放牧頭数 (うち子牛)	草 地 面 積		組 合 員 数
				改 良	自 然	
八幡平	3	6	415 (175)	203 ha	400 ha	92 人
尾去沢	1	1	58 (25)	7	200	18
花 輪	2	4	500 (220)	82	400	190
十和田	7	15	844 (362)	348	650	149
小 坂	8	11	724 (277)	90	1,150	233
計	21	37	2,541 (1,059)	730	2,800	664

各組合で1ないし3頭を供用し、また放牧地の看視人は1ないし2人で管理している。

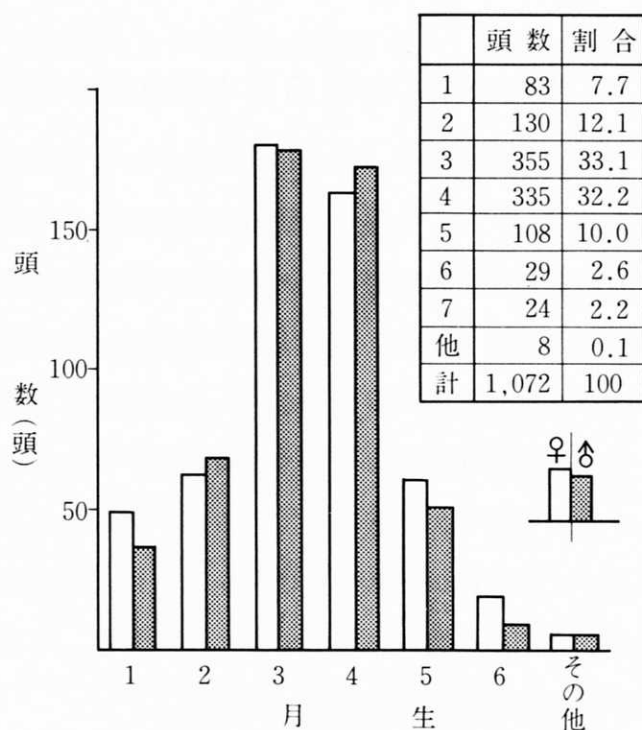
このような状況下で、当地域においても国の示した家畜改良増殖目標に従い、日本短角種の生産技術と資質向上及び経費の低減を図るため、関係機関と一体になり努力している。しかし、昭和56年、57年の2年連続で子牛価格が低迷し、回復の兆しをみないままに推移したため、生産費原価を下回る生産農家もみられ先行き不安と意欲の減退ともなり、これが牛飼いはなれにつながるのではないかと憂慮されている。

そこで、当地域における日本短角種の飼養頭数が伸び悩んでいる原因について考えてみたいと思います。

鹿角地域における肉用牛の飼養状況は、県内隣接地の北秋田郡及び山本郡地域で飼養されている褐毛和種や由利及び仙北地域の黒毛和種にたえず価格の面で影響され、一時的にこれら品種の導入が試みられたが、日本短角種はまき牛繁殖飼養形態をとり、他の農作業とも競合がなく、更に生産費が安く飼いきやすいなどの優位性から他品種の増頭はみられない。

表－2 年度別子牛市場成績

年次	性別	頭 数	平 均 重	1 kg当 り価格	平 均 令
53	めす	585	211 kg	826	7.6
	雄	541	225	751	7.5
	去	10	237	843	7.4
54	めす	468	218	1,206	7.4
	雄	495	239	1,092	7.2
	去	—	—	—	—
55	めす	451	221	1,063	7.0
	雄	479	247	853	7.1
	去	6	285	879	8.2
56	めす	445	223	735	7.3
	雄	483	242	621	7.2
	去	4	284	670	7.8
57	めす	435	205	703	7.3
	雄	409	227	644	7.1



図－2 月別の分娩頭数

3 飼養上の問題点

問題点の第一は、まき牛繁殖のため図-2にみられるように、春生れの子牛が中心となり秋市場に集中するため、肥育牛飼養者から周年性に欠けるとの理由で敬遠され、乳雄素牛に移行するような事例もみられた。第二は種雄牛、放牧場、分娩時期などの条件格差から、市場上場子牛の斉一性に乏しく、これが子牛価格に直接はねかえり、農家経営の不安定要素のひとつになっている。第三は肥育飼養形態において、素牛導入時期のかたより、施設及び資金の回転等の理由から、増体をはやめるために濃厚飼料多給方式をとり、消費者から日本短角種は安くておいしいということの一方、出荷先からは皮下脂肪が厚く肉質が悪いといわれてきた。

これらの問題を改善するため、当組合では関係機関の指導を得ながら、昭和45年からの精液の凍結化を契機に、奥羽種畜牧場より人工授精用精液の分譲を受けた。育成牛を対象に冬期舎飼時の早期種付、早期分娩を呼びかけ、人工授精を推進した。当時日本短角種の飼養者は他品種の飼養者層と比べて人工授精に対する意識が薄く、当組合の人工授精師が人工授精の普及に努めてきた。その結果、昭和47年には改良意欲のある者によって80頭台まで進められ、人工授精率で6%台となった。昭和48年ころから生産子牛の優位性を農家が認め、人工授精実施頭数の伸びを示し、現在では人工授精率が23.8%、授胎率で57%となっている。

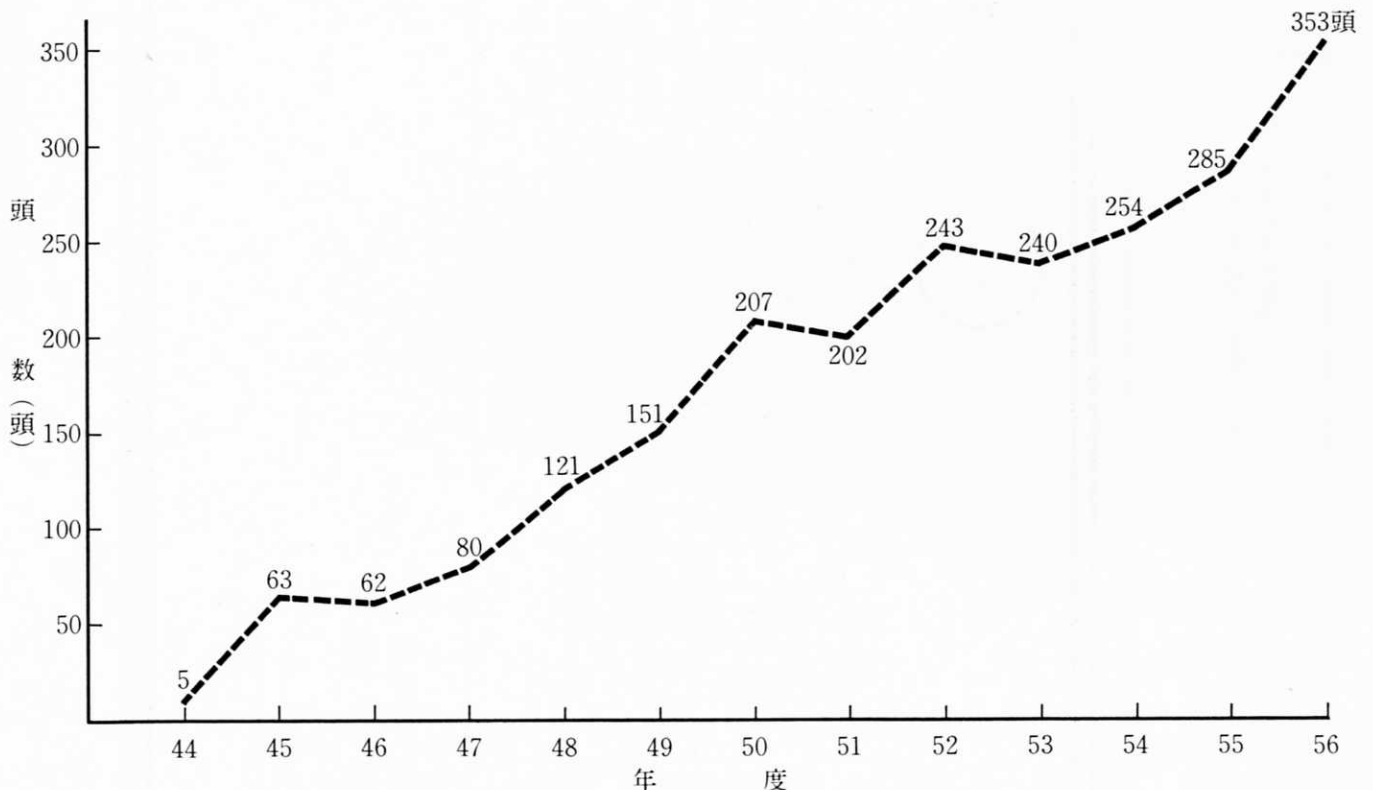


図-3 人工授精頭数の年次推移

しかし、一時期において子牛価格の上昇に伴い、冬の舎飼時における濃厚飼料の多給方式が進み、発情の微弱、授胎率の低下、分娩間隔の伸びが産次を追ってみられるようになった。また、飼養管理技術の農家間の格差から分娩間隔が拡大し、まき牛繁殖に戻らざるをえない牛も多くみられるなど、人工授精実施率の伸び悩みの原因となったものと思われる。

改良推進のため

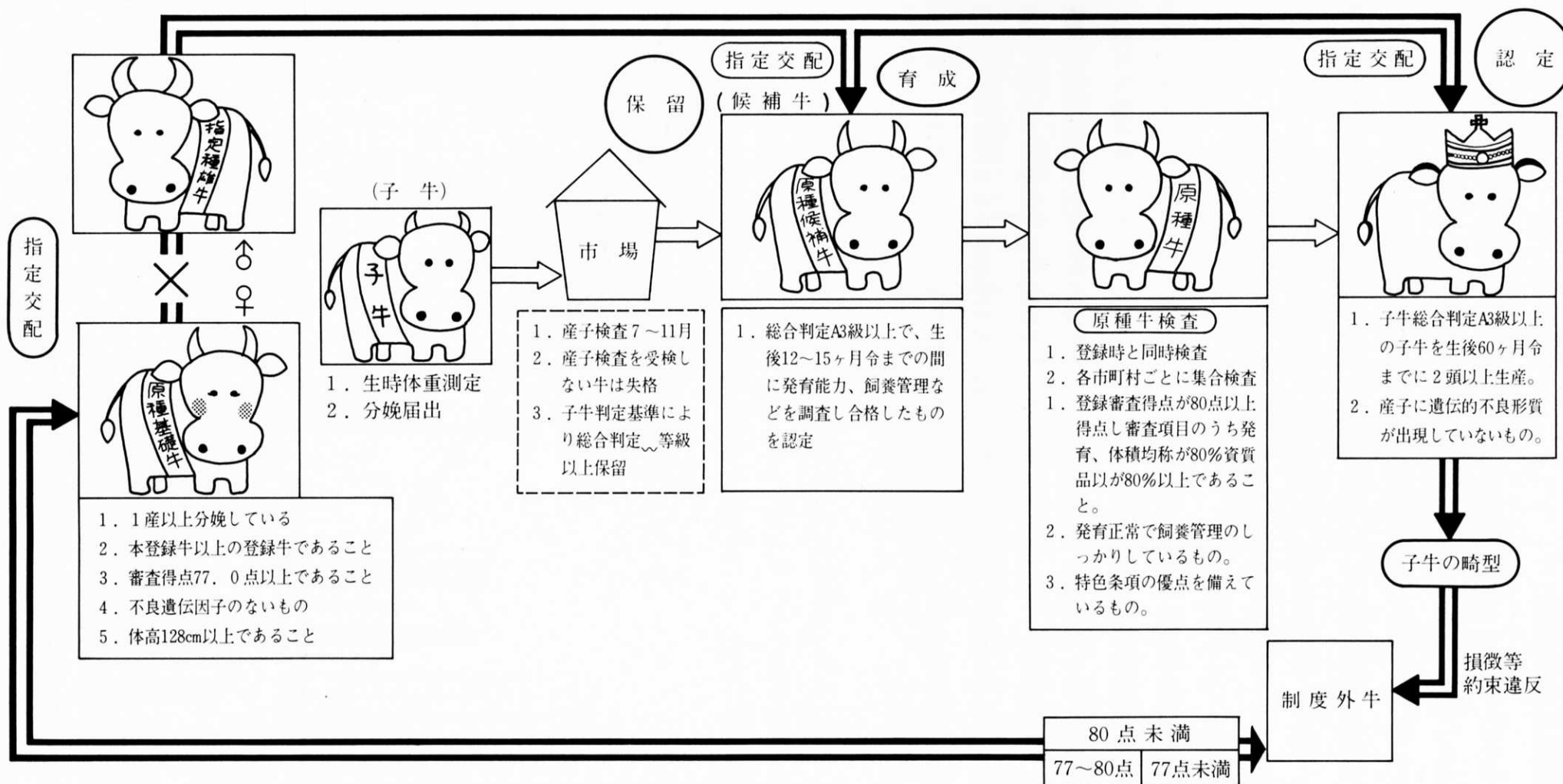
鹿角地域における日本短角種子牛の齎一性を高めるため日本短角種登録協会の審査標準に基づき、地域の集団育種を推進し、育種牛（系統）を造成する。

審議委員会が指定した種雄牛

(♂ A ♂ B ♂ C)

制度の内容

- (1) 改良雄牛（種牛）の選定
- (2) 指定交配雌雄牛の選定
- (3) 計画交配（指定交配）
- (4) 産子検査
- (5) 優良牛の保留及び育成指導
- (6) 繁殖成績及び事業成果の調査研究
- (7) 調査研究成果の検討会及び研究会の成果
- (8) 計画交配成果の現地検討会の開催
- (9) その他この事業に必要な事項



図－4 鹿角日本短角種改良推進組合原種牛制度

4 日本短角種の改良と増殖

図－４に示したように、鹿角地域における日本短角種の斉一性を高めるため、本年度から鹿角日本短角種改良推進組合を組織し、人工授精とまき牛繁殖を組合せた計画交配を実施し、資質共に優秀な牛を生産し、地域内で子牛から肥育までの一貫した生産体系の推進を図ることとした。その結果、国の示す家畜改良増殖目標に少しでも近づけ、消費者からも喜ばれる日本短角種を生産し、地域での増頭を図ろうとするものである。

今後、地域内の改良を推進するに当たっては、皆様方の御教示を賜るようお願いします。以上で現地からの報告とします。